

「無反省にならないように」

大本山總持寺単頭 柴田康裕

とうす

暑い夏の日のことでした。御本山ではトイレのことを東司と言いますが、シャツ一枚で部屋の中にいた私は、東司に行こうとして、衣紋掛けに掛けてあった着物を着て部屋を出ました。

用を足して手洗い場の鏡を見ると、なんと着物を裏返しに着ているではありませんか。

その時、私は「しまった」と思いました。というのも、その日は暑かったために、朝の諷經（お勤め）の時に着ていた着物が、汗でぐっしょり濡れてしまっていたのです。そこで、それを乾かすために、わざわざ裏返しにして衣紋掛けに掛けていたのです。

そのことをすっかり忘れていた私は、表と裏を確認することもなく、いつものように、そのまま着物を着て部屋を出ていったのです。東司に行くまでの間、何人かの修行僧と出会いましたが、誰も何も言わずに、そのまま通り過ぎていきました。彼らも気づかずにいたのか、それとも「おかしい」と思いながらも、そのまま素通りしていったのか分かりませんが、いずれにせよ、まことに恥ずかしい思いをいたしました。

そこで思ったことは、自分の姿は、鏡にでも映さないかぎり、自分では見えないということです。

また、いつものようにしていることを無反省にしていると、それがたとえ間違っていたとしても、なかなかそのことに気がつかないということです。

これは姿や恰好かっこうといった外見だけを言うものではありません。自分の見方や考え方、あるいは毎日の習慣や、それまでの慣例といったことも、これと同じようなことがあるのです。

だからこそ、いつも仏様のみ教えに照らし合わせながら、自分自身を点検していくことを怠ってはならないのです。

「それは当然のことだから」とか「いつもしていることだから」という惰性的で無反省な生き方ではなくして、「本当にこれでいいのだろうか」とか「もう少し違う角度から見てみよう」という、柔軟で謙虚な生き方を、仏様のみ教えを通じて学んでまいりたいと思います。